

アメリカ素描

第二部 185-290頁 桑島

- 第一部で、日系を代表としたアジア系移民に興味を注いだ著者が、今度は「ワズプ」の本拠地、「東部のエスタブリッシュメント」を確認するべく訪米する。
- 文学的伝統を継承するアイルランド人、アメリカ独自の文化を継承するアフロ・アメリカン、法の国家を設計図を船の上で作り上げたイギリス人などを通して、「アメリカ文明と文化」の探索が再び始まる。

技術移民

- 小村寿三郎の書生、榊本卯平の留学記。
- 「純粹の米国生まれの人は(製図室には)、極めて少なかった」。榊本の記述から、ヨーロッパからの頭脳(技術)移民が、彼らの国で遂げられなかった志を、新大陸で思いのまま伸ばしていていたとも言えなくない。
- 榊本にとって、アメリカの力は、給料の良さと食べ物との安さと、それに(酒屋でタダでごちそうが食べれる)自由だった。

文明主義としての品質管理

- 「品質」。それは、長い間アメリカ文明を象徴するものであった。
- 第2次大戦下、思想・方法論として品質に対する、強力な統御が行われた文明国アメリカ。
- 高度な技術が熟練職人の伝統として、文化レベルで継承されたドイツ、スイス、日本。
- 戦後、法や監督による規制を捨てた文明国と、それを自分自身の文化にしてしまった国の差。

文化から文明への昇華

- 1960年頃までのニューヨークは、江戸時代といった感動的な形容。
- 一つの固有文化が多様な文化群の中で共通のものとして昇華するとき、簡略化が行われる。アイリッシュを起源とするセント・パトリックの祭りが「緑色」のカッコ良さを象徴する行事になった。

アフロ・アメリカンの文化

- 著者は「(彼らこそ)アメリカを故郷とする生粋のアメリカ人ではあるまいか」と説く。ハーレムのレストランで、アメリカの家庭料理に出会う。「かすかな甘味があり、ひどくうまかった」。
- 小説や映画:「老農夫や歴戦の軍曹、あるいは引退したトランペット吹きが見せる豊かな微笑や悲哀の表情の中に、平素人が忘れている人類の普遍的な感情の根を見出す」。

発表者所感

- 初渡米の14年前、帰国前にアメリカ料理が食べたいと言った時の、当地の人々の困った顔が思い出される。著者も、アメリカを知ろうと躍起になり、潜在意識の中で「アメリカの文化」を探してしまったに違いない。
- 各民族が各々の文化を継承し、文明によって共同生活を営む国。マッシュ(ド)・ポテトに、この国固有の文化を感じたときの、著者の心の歓喜が聞こえてきそうだ。

ゼロ会に参加された方々からの所感

- 移民技術者に少なからず依存する今のシリコンバレーの原型を、100年前に榊本卯平が訪れた東部の造船所に見出す。「自由 = タダの食事」の力をして就業意欲を向上させることは、身近な企業文化として生きている。
- アフロ・アメリカンの熱心な信仰姿勢も、彼らがアメリカ文化の継承者であることの一つの象徴かも。ニグロ・スピリチュアルの聖歌は、一般人にも口ずさみ易く、日本の演歌に似た、親しみ易さと味わいがある。